ウィリアム・ジェイムズの実在論

村野宣男

序

実在論の立場は，主観の経験と独立した存在を想定するところにあるといえる。しかし，何が実在するものであるかということになると，問題がでてくる。素朴実在論（naive realism）では，具体的経験表象そのものが実在するものの写しであるとするが，同一対象が複数の人々によって異って経験される場合，矛盾律を犯すという結果が生じてくるであろう。色とか音は，視覚と聴覚を媒介して初めて存在するものであり，感覚器官の差異により，同一対象に対する感覚内容は異ってくる。ロックは，外的実在を第一性質と第二性質とに分け，第二性質たる色とか音は，そのままの形で実在するのではなく，それらを人間の心の対象とすべき力（power）として存在するものとした。そして，固体性，延長，形，運動あるいは静止，数等は，そのままの形で外界に存在するとして，第一性質と名ずけたのである。バークリーは，経験すなわち知覚の場面にのみ実在を認め（自我，神および観念の実在を認めたが）ロックのいう第一性質の実在性を否定した。ヒュームは，感覚的印象を第一義とした故に，印象を超えた外的実在を承認することが出来ず，外的実在は，単に信念（belief）によって受け入れられるという懐疑的な観点からみられた[1]。ヒュームにおいては，外的実在は決っして断言されることはなかった。経験に忠実である限り，ロックの第一，第二性質たる外的実在は消滅して，ヒュームのように，印象のみを認める立場に至るのは当然であろう。経験論を撤底させることの結果としては，あるいは，ヒュームの見解は正しいかもしれない。しかし，ヒュームのような懐疑論に従うと，われわれの生活の調和が破れるという恐れがある。目を閉じている間も，われわれをとりまく世界は存在していると断言するのが通常であって，誰がただ信念においてのみ存在していると考えるだろうか。われわれが，経験するしないに拘らず，われわれとは独立に外的実在が存在するという立場は，常識の受け入れるところである。常識は，あくまでも常識であって真理ではないという反論もあろう。しかしながら，あるいは学問的といわれて来たものが，現実をありのままに捉えない観念論的抽象論であって，常識の中にこそ真理が宿っているとも考えられる。常識の立場は，認識論のような，狭い立場を超えた，人間の“生”の立場にあるともいえるのではないか。このような問題考察の一端として，ウィリアム・ジェイムズの実在論を検討してみたい。

ジェイムズの『プラグマティズム』における真理論をみると，ある観念の真理性は，その観念のもたらす実用的効果においてのみ決められるという印象を受ける。特に，神の観念の真理性に関しては，その観念のもたらす宗教的情緒が有用である故に真であるとされる故，神が実在しよ

うがしまいが，神の観念は真であると理解されよう。この理解によれば，ジェイムズの真理論においては，観念と実在との一致という図式が除去されていると見られる。しかし，このような真理論理解は誤りであって，ジェイムズは『プラグマティズム』，『真理の意味』その他の著作において，実在（reality）という言葉を頻繁に用いており，“真理は，どの辞典もあなたに語るように，われわれの観念のもつある特質である。それは，観念が‘実在’と一致することを意味している。一方，偽は，観念が実在と一致しないことを意味するのである。”[2] として，真理は，観念と実在との一致にあるという図式を明確に呈示しているのである。又，“われわれの真理の全ては，実在に関する信念である。そして，個々のいかなる信念においても，実在は，独立なる何ものかであり，作られるものではなくして，見出されるものとして活動している。”[3] としており，われわれの主観から独立した実在を考える立場を示している。ジェイムズは，このように実在論の立場を宣言しているのであるが，外的実在に関して懐疑的な側面も見られないわけではない。『根本的経験論』においては，主体，客体の二元的実在を否定して，単なる純粋経験の存在のみを主張しており，全く実在論が否定されているかのように思える。『プラグマティズム』，『真理の意味』においては，一般に固定的・静的とされている実在が，変化し，又，観念と実在の一致に関しても，主観的満足感が基準とされるプラグマティックな見解が提示されている。『心理学原論』において述べられている実在観は，ヒュームの信念による実在の見解と類似しており，断言的色彩が薄い観を与える。このように，ジェイムズの実在論の吟味を行うと，実在論の立場そのものが動揺し，矛盾の中に追い込まれてくるように思える。本論では，『プラグマティズム』，『真理の意味』，『心理学原論』，『根本的経験論』を中心として，ジェイムズの実在論を次の順序で検討し，その内容と意味をみて行きたい。1. ジェイムズの実在論には，経験論的アプローチがなされていること。2. 経験論的アプローチにおける，ジェイムズの実在論の特色，およびプラグマティックな価値観の実在論への介入。3. ジェイムズの実在論における信念の役割，および，ジェイムズの実在論主張の動機および根拠。

1) Ralph W. Church, Hume's Theory of the Understanding, London, 1968, p. p. 95 ff.
2) W. James, “Pragmatism”, Pragmatism and four Essays from The Meaning of Truth, New York, 1960, p. 132.
3) ibid. p. p. 159-160.

1

ジェイムズが，実在を論ずるにあたって取る最も基本的態度は，経験の中に実在を捉えることにある。この態度は，ジェイムズの根本的経験論の基本的原則である経験されるもののみを語り，経験されないものを拒否するという考え方と一致している。したがってジェイムズは，合理論あるいは観念論が行うように，直接経験はされないがより本質的なものとされる経験の背後にある実在をたてない。たとえこのような実在を考えるにしても，あくまでも二義的であり，直接的経験の流れの中にあるものを一義的とするのである。すなわち，われわれをとりまく具体的経験界が，第一義的な実在であるとする。たとえば，ジェイムズは，普遍概念（universals）とか，クラ

ス概念（class names）等を，われわれの知覚を整理統合しているものとして実在性を認めているが，知覚の流れ（perceptual flux）こそ真にわれわれが依拠せねばならぬところの実在であるとして[1]“概念は，第二次的な形成物なのであり，代理的なものである。この概念は，知覚の流れを無視したり，理解を不可能するばかりでなく偽るものである”[2]とする。あくまでも，直接経験の場面を第一義的なものとするのである。科学的・生理学的に感覚における認識過程を考えると，実在するものは，原子とか分子たる物質であることになるが，ジェイムズは，“外的実在に関するわれわれの科学的見解は，非常に抽象的な方法である。”[3]と語っている。科学においては，原子とか分子が外界に一定の法則の下において存在することが想定されるが，この事実をわれわれは経験しているわけではない。ジェイムズは，“あらゆる科学的概念は，まず第一に，ある者の頭脳におけるところの‘自発的変化（spontaneous variation）’にすぎないのである。”[4]とする。すなわち，科学的に考えられる外界は，直接経験の対象ではなく，思考による抽象的所産にすぎないとされる。しかしながらジェイムズは，“このような科学的代数学は，たとえそれがわれわれに与えられている実在に似ていないにしても，（全く奇妙なことに）実在にあてはまるのである。……それは，このようにして，単に理論的喜びに止まることなく，われわれの予期に対する実際的な導きになる。”[5]として，プラグマティックな価値を科学において立てられる実在に認めている。科学における実在にこのような価値を認めても，それは第二義的実在であり，第一義的実在は，あくまでも直接経験されるものとしての実在である。『真理の意味』においてジェイムズは，実在は経験されるものであり，経験の中に実在を限定することは，知られざる（unknowable）種類の実在を排除することを意味すると述べている[6]。ところで，このようなジェイムズの実在観は，一見，素朴実在論に立ち戻るようにも思われる。ジェイムズは，観念と実在の一致の例に，メモリアル・ホール[7]とかインドの虎[8]等を挙げており，ジェイムズ自身，自己の立場を“素朴実在論あるいは常識的な見方”[9]であるとしている。しかし，ジェイムズのこの態度は，単に無反省的に取られているのではなく，具体的に直接経験されずに単に頭の中で考えられる抽象物と，経験されるものとしての第一義的実在とを峻別して，前者は，たしかにプラグマティックな価値を持つが，第二義的実在であることを確め，“生”の場を抽象的事物によって乱されまいとする意図を見なければならない。

ジェイムズにとって第一義的実在は，あくまでも経験されるものとしての実在である。しかし，経験される限りでの実在という概念は，自己矛盾にあるのではなかろうか。すなわち，実在とは，本来，われわれの経験とはかかわりなしに，それ自体として存在するものではないか。この点に，ジェイムズの実在論における基本的な問題がある。ジェイムズは，根本的経験論の立場より，経験より外れたものは，あくまでも排除する方向を取りながら，主観主義に陥ることなく実在論を主張するのである。このような矛盾した立場にある故に，不変であるべき実在が変化したり，実在が現在経験されて初めて，過去におけるその存在が主張されるなど，奇妙な論が展開されてくる。実在論の立場が，そもそも形而上学的立場であるとすれば，ジェイムズの経験される限りの実在という主張は，実は，実在論に立っていないともいえる。ここで，次のようにいえはしまい

か。即ち，ジェイムズは，形而上学的に実在を考えていたのであるが，自己の実在論が，観念的になるのを恐れ，経験主義との結びつきを試みたのである。この試みにおいて，実在は変化するとか，現在の経験において過去における実在の存在が保証されるという考えが出てくるのである。これ等の問題に関して，更に吟味を行ってみたい。

1) W. James, Some Problems of Philosophy, New York, 1968, p. 78. 尚，ジェイムズは，関係 (relation) も，直接経験される実在としている。この点，ヒュームと異なる。(W. James, Essays in Radical Empiricism and A Pluralistic Universe, New York, 1958, p. p. 42 ff. 参照)。
2) ibid. p. 79.
3) W. James, The Principles of Psychology, New York, 1950, Vol. II, p. 633.
4) ibid. p. 636.
5) ibid. p. 636.
6) W. James, The Meaning of Truth, New York, p. 100.
7) W. James, Essays in Radical Empiricism, p. 79.
8) W. James, The Meaning of Truth, p. 43.
9) ibid. p. 50.

2

上に述べた問題を考案するにあたって，ジェイムズの実在観にプラグマティックな価値観が介入していることを考慮せざるを得ない。ジェイムズが，プラグマティズムの視点から実在を捉える態度は，経験論的態度と共に，彼の実在観に常に見られるのであり，これは，むしろより基本的態度であるともいえる。このプラグマティックな視点を考慮しつつ，経験論アプローチがなされているジェイムズの実在論の内容を検討してみよう。

まず，実在は変化するという事が何を意味しているかをみよう。たとえば，われわれの経験にかかわりなしに，ある実在が存在していると仮定してみよう。この場合，この実在が何であるかという問に如何にして答えることができるであろうか。合理論者，観念論者は，たとえば，実在は神であるというように答え，その根拠を論理的証明によって示すであろうが，このような回答が穏当でないとしたら如何にして答えたらよいか。実在は，経験されるものであるにしても，それをわれわれが経験し，口にする時には一つの判断を行っている。ジェイムズは，“だれにしても，単純な感覚をそれだけで持っているわけではない。意識は，われわれが生れ落ちてよりこのかた対象との関係に満ちているのであり，われわれが単純な感覚と呼ぶものは，識別的注意の結果であり，しばしばこの識別は非常に強く行われている。”[1] といっており，感覚のように単純な経験にもすでに判断の存することを示している。この判断は，実在そのものを言い当てているとは限らないが，このような経験的道すじ以外に実在を追求する方法はないと，ジェイムズは考えている。たとえば，自然科学の研究対象は，複雑であり，真の判断，すなわち実在をつきとめる為には長い道程が必要とされるであろう。われわれは，われわれの外にある実在を経験において捉えて行くより方法がない。いわゆる経験される実在として捉えて行かねばならぬ。この実在追

求の過程において判断が新たにされて行くが，この意味において，経験されるものとしての実在が変化して行くのである。最終的には，絶対的実在に到達するであろうが，このような絶対的実在（absolute reality）は，限界概念（grenzbegriff）[2] であるとされる。“プトレマイオスの天文学，ユークリッドの空間，アリストレスの論理学，スコラ的形而上学は，数世紀にわたって有益であったが，われわれの経験はこれ等の限界を超えてこぼれおち，今やわれわれは，これ等のものをただ相対的に真，すなわち，それらの経験の領域内においてのみ真であるといっている。”[3] といい，自然科学は，常に真の実在への過程にあることを示している。この意味において実在は変化するといわれるならば，われわれはジェイムズを理解することができよう[4]。

しかし，ジェイムズが，実在そのものが変化すると主張するところに，彼の実在論は更に複雑になる。“経験は，変化の中にある。そして，真理に関するわれわれの心理的判断は，変化の中にある——ここまでは，合理論者も同意する。しかし，実在それ自身，あるいは，真理それ自身が変化するということには，決して同意しないのである。”[5] とジェイムズは述べる。経験と独立なる実在そのものが変化するならば，ジェイムズは認識論に関して，全くソフィスト的な相対主義に陥ってしまうのではないか。実在そのものと，経験されるものとしての実在の双方が変化するならば，われわれの認識が成立することができるであろうか。実在そのものが変化するとは何を意味しているのか。これら問題を，ジェイムズの人本主義（humanism）[6] と，プラグマティックな真理観を考慮することによって検討してみよう。ジェイムズでは，合理論的な実在観，すなわち，実在は静的にして不動であるとの考え方に嫌悪をいだき，実在は人間の意志によって作り変えられて行くものであると主張する。物質的自然環境においても，あるいは『信ずる意志』に見られるように人間とか神との関係においても，意志が実在を変え，作り上げて行くものであると主張する。このような意味で，実在そのものが変化するというのである[7]。プラグマティズムにおける真理観によれば，真なるものは，われわれに満足感を与え有益なるものとされる。『真理の意味』で，ジェイムズは次のように述べる。“私は，真の観念がもたらすところの知的・実際的満足の大きさ以外に，真の観念が生長して来たこと，あるいは，真の観念が偽又は無為の観念と区別される基準を考えることはできない。”[8] この真理に関するプラグマティックな基準と実在変化の考えを組合せると，われわれは実在そのものに働きかけ，作り変えることによって，実在とのより満足すべき関係に入ることができ，真理が発展するということになる。実在それ自身が変化し，真理が変化するとは，以上のような意味でいわれるのである。ただ，ここで見られる実在観，真理観は，固定的に実在するものを客観的に，主観を交えずに求めて行こうとする自然科学的実在観・真理観とは異なることはいうまでもなく，この点をはっきり識別し，体系化しなかったのは，ジェイムズの欠点である[9]。ジェイムズの実在論は，このような人本主義，プラグマティックな真理観の上にある特異なものである。

次に，ジェイムズの実在論における，“現在の経験による実在の過去における存在保証”と“検証の進行過程における実在の保証”の問題をみよう。ジェイムズは，“観念によって対象を知るということが，可能的に含意し，意味している全ては，先験的な意味でなく，明確に感ぜられた

変遷の意味におけるこのような連続あるいは協同に存しているのである。このような変遷が感ぜられる場合には，最初の経験は，常に最後のものを知っているのである。[10]"という。ここでいわれる変遷あるいは連続とは，検証過程がスムーズに進行していることであり，ジェイムズはこの過程を，満足すべき働きあるいは導き（satisfactory working or leading）[11] ともいっている。又，ジェイムズは，"われわれの経験の変遷がこのようなものである場合は，最後の対象は，たとえ始めにおいては，自己超越性をもたない他の経験と同様なそれだけの一片の経験でしかなかったにしても，始めから心の中にあったといってよい……"[12] とする。以上のことから次の二つのことがいえる。第一は，ある観念の実在は，その観念が検証されて初めて確められるのであるが，確められたならば，始めから，すなわち確められる以前から存在していたということである。ここに，ジェイムズが実在論の立場をとりながら，実際に実在するものが何であるかということに関する経験論的態度がはっきりあらわれている。第二には，検証の進行過程において観念と実在が一致するという考えが示されている。すなわち，ある観念がまだ最後まで検証される以前に，その観念は実在と一致しているという考えである。この進行過程は，満足すべきスムーズなものであるが，"満足"には，プラグマティックな価値観が介入していることに注意せねばならない。そして，ジェイムズは，満足すべき過程が生ずるのは，そもそも実在の遡求的検証力（retroactive validiating power）によるものであり[13] "妨げなく考えが進行することは，100の内99まで，完全な意味で知っている事の実際的代替である。"[14] とする。ここでは，実在は直接経験されておらず，主観的満足感によって捉えられているのであり，ジェイムズの実在観のプラグマティックな側面が強く出ていると見なければならない。

ジェイムズにおける実在は，経験の中に捉えられ，経験的検証において確められあるいは確信される。又，実在そのものは，われわれの行動と経験の中に変動する。ジェイムズの実在観には，あまりにも経験論的傾向が強く，単に経験的事実のみを認めて，敢えて経験の外に実在を置かない方が，体系的により一貫するのではないかと思われる。すなわち，観念は，経験と調和的関係を持つ限り真であり，観念も経験も変化し，真理は変動するとして，われわれの外にある実在との一致を述べない方が矛盾のない体系が形成されるのではないだろうか。しかし，ジェイムズには，あくまでも実在論を主張する立場があり，ここにジェイムズの実在論の問題が存するのである。次にジェイムズの実在論における"信念（belief）"の問題をみて，ジェイムズは何故に実在論を主張せねばならなかったかを，結論的に考察してみたい。

1) W. James, The Principles of Psychology, Vol. 11, p. 244.
2) W. James, The Meaning of Truth, p. 239.
3) W. James, Pragmatism, p. p. 145-146.
4) 実在の変化は，科学的領域においてのみいわれることではない。道徳的宗教的領域においてもいわれる。W. James, "The Moral Philosopher and the Moral Life," The Will to Believe, New York, 1956 を参照。
5) W. James, Pragmatism, p. 147.
6) 人本主義に関しては，『プラグマティズム』第7章，『真理の意味』第5章を参照。

7) ジェイムズは，スペンサーのいう意識の外界に対する受動性という考えを否定し，意識はあくまで外界に能動的に働き，外界を変化させると考える。W. James, "Remarks On Spencer's Definition of Mind as Correspondence," Collected Essays and Reviews, New York, 1969. 参照。
8) W. James, The Meaning of Truth, p. 159.
9) A. J. Ayer, The Origin of Pragmatism, MacMillan, 1968, p. p. 183. ff. 参照。ここで Ayer は，ジェイムズが科学的命題と道徳的・宗教的命題を区別していることを示している。
10) W. James, Essays in Radical Empiricism, p. 56.
11) W. James, The Meaning of Truth, p. 160.
12) W. James, Essays in Radical Empiricism, p. 57.
13) ibid. p. 68.
14) W. James, The Meaning of Truth, p. 69.

3

ジェイムズは，検証における満足すべき進行において，観念は実在に一致することを主張したが，この進行過程には，"信念 (belief)" という情緒が伴われている。信念は，ジェイムズの実在論において大きな役割をなしており，ジェイムズの実在論のプラグマティックな側面を明らかにする意味でも，信念の概念を検討する必要がある。しかし，ジェイムズが，彼の実在論において信念を云々するとはいえ，ヒュームのように，実在そのものが懐疑的に考えられ，実在はただ信ぜられるものであるといっているのではない。実在はそれとして存在するが，何が実在であるかという問に信念が役割を果すのである。『真理の意味』の中でジェイムズは，実在に関して次のように述べる。"何ものかを実在と呼ぶことにおいて，何がわれわれの保証となるか。唯一の答は，実在に関する当の批判者あるいは探究者の信念 (faith) である。"[1] 限界概念としてのあるいはわれわれの経験に拘らず存在するところの実在は，経験論的方法においては完全に捉えられまい。結局，実在は，信念という方法によってのみしか考えられないのではあるまいか。『心理学原論』の第21章・"実在の知覚 (The Perception of Reality)" において，実在は信念 (belief) によって捉えられることが詳しく説明されている。ここで，"誰れも，物を想像することと，そのものの存在を信ずることの間の相異，あるいは，ある命題を想定することと，その真理に同意していることの相異を知っている。同意あるいは信念の場合，対象は心によって理解されているばかりでなく実在をもっと考えられている。信念は，このように実在を認識するところの精神状態あるいは機能である。"[2] といい，ジェイムズの実在観の基本的態度を明示している。"このような信念あるいは実在感たる内的性質においては，何ものにもまして，情緒 (emotion) にくみする感情が存するのである。"[3] として，信念は情緒とされ，実在は主観的立場から語られることが明らかになる。このような情緒たる信念は，自然科学における検証の場合は，命題に相応する対象を知覚することにおいて得られる。ジェイムズは，"感覚的対象は，このように，われわれの実在であるか，あるいはわれわれの実在の試金石である。考えられた対象は，感覚的結果を示さねばならず，さもなければ信ぜられない。"[4] としている。しかし，ジェイムズは一方，情緒的信念の概念をこのような感覚的検証の枠を超えたところまで拡張し，主観の場において信念が得

られれば，実在が保証されるとする。“実在は，われわれの情緒的・活動的生活への関係を意味しているにすぎない。この意味において，われわれの関心（interest）を刺激するものは，全て実在的である。”[5] といい，“何よりもまず，個人的欲求の感覚を持って把握するもの……”[6] に実在性を与えるとする。“実在におけるわれわれの要請は，われわれの行為と情緒，すなわちわれわれの快と苦痛に至って終る”[7] という言葉は，実在が主観的に決められることを顕著に示している。以上のような意味での信念にはプラグマティックな価値観が介入しており，観念の実在性は，客観的検証の枠から全くはみだして捉えられているといえる[8]。しかし，ジェイムズは，ヒュームと異なり，実在が外界に存在することを想定しているのであり，この実在を確める方法として“信念”の意味があるのである。尚，信念の概念は，次のような問題点をも指示していることを付け加えておきたい。すなわち，実在とは，本来経験に関係なしに存在しているものであり，たとえそれが経験によって確められたとしても，その経験の時点を外れた場合は，信念によって考えるより方法がないということである。この点をジェイムズの“信念”の概念は，含意している[9]。

ジェイムズは，実在論の立場にあるとはいえ，実在に関する経験的接近の態度が強く，又，プラグマティックな価値観が介入しているため実在判断の基準が主観的になり，実在論の立場そのものが矛盾し曖昧になっているように思える。ジェイムズの根本的経験論においては，更にこの矛盾がはっきりしている。根本的経験論においてジェイムズは，実体（entity）としての意識および意識の対象を否定して，あらゆる経験表象の根源に純粋経験（pure experience）を置く。純粋経験は，無反省的に捉えられた単なる“それ（that）”[10] であり，まだ判断されていない原初的素材（primal stuff）であるとされ，これが反省によって，われわれにとっての具体的経験（what）になるとされる[11]。このような純粋経験が，反省により，別々の経路において具体的なわれわれの経験に発展することにより，主観と対象の場面がそれぞれ展開されてくるとする。ここでは，根本的経験論に関して立ち入った考察を避けるが，根本的経験論が，実体あるいは実在を形而上学的に立てる立場を否定して，経験（純粋経験）を存在および認識の出発点としていることは明らかである。根本的経験論は，実在論と対立関係にある。ジェイムズは，根本的経験論の枠内で実在論の立場を守ろうとして，純粋経験が主観と客観の二つの経路に分かれた場面がいわゆる二元論の立場にあり，認識の模写説（representative theory）が保持されるとしているが[12]，たとえここで実在が主張されたにしても，純粋経験を根源とする以上，実在の意味を失っているのである。しかも，根本的経験論が述べられている『根本的経験論』における“純粋経験の世界”という論文において，ジェイムズは実在論の立場を強く主張している。ジェイムズはこの論文で，“根本的経験論は，事実上，バークリーやミルの見解よりも自然実在論（natural realism）により接近している。”[15] としている。このように，根本的経験論それ自体が，実在を廻って矛盾の中にあるが，これはジェイムズがあくまでも実在に固執する態度から来るものである。何故に，ジェイムズはこのように実在に固執するのか。実在主張の根拠が最後の問題となる。

実在への検証過程，そこにおける信念について述べたところで，プラグマティックな価値観が

強く混入していることを見た。ここで，ジェイムズが実在を立てる根拠は，実は純粋にプラグマティックな動機によるものであることを結論として考察してみよう。『真理の意味』において，ジェイムズは次のように述べている。“もし感覚の内容が，その感覚それ自身の外の宇宙に存在しないで，感覚と共に消滅するとすれば，慣例的にわれわれは，それを実在と呼ぶことを拒否する。そして，感覚を構成するところの主観的様相あるいはせいぜい夢と呼ぶのである。感覚が定まった意味で認識的である為には，感覚は自己超越的であらねばならぬ。そしてわれわれは，感覚の内面的特質 q に対応するところの感覚の外にある実在を創造するように神を説き伏せねばならぬ。かくしてのみ，感覚は独我論（solipsism）の状態から脱れうるのである。もし今や，新に創造された実在が，感覚の性質 q に似ているならば，その感覚は，その実在を認識しているとわれわれに理解されている。”[14]ここにいわれていることからすると，ジェイムズにおいては全くプラグマティックな観点から実在が立てられていることがわかる。すなわち，夢と現実を区別するというプラグマティックな要求が，実在論主張の根拠になっているのである。経験論的方法によって哲学を語ろうとするジェイムズが，あくまでも実在を主張して行こうとする根拠は，このようなプラグマティックな要求にあるのではなかろうか。外的実在が存するか否かということは，本来形而上学的問題であり，われわれそれを証明したり検証する手段をもたないといわなければならない。それ故に，実在が立てられるそもそもの根拠は，認識論的なところにあるのではなく，価値的な人生論的なところにあることになる[15]。実在を立てることによって，宇宙は，ふわふわしたものでなくなり，落着きのあるものとなるであろう。実在は，『プラグマティズム』において述べられているところの，合理論のプラグマティックな価値，すなわち宗教的な価値さえ持つことができるといえる。実在しないところの神に，何の宗教性があろうか[16]。このような視点からジェイムズの実在論を眺めると，ジェイムズの執拗に実在論の立場を守ろうとした理由がわかる。又，ジェイムズが，実在論の立場が観念論に向う危惧をみて，経験論的態度を取ったことも，プラグマティックな態度より当然である。実は，ジェイムズの経験論的態度も，プラグマティズムから来ているのである。ジェイムズにとっては，あらゆる場合に“生”を中心とするプラグマティズム的視点が優先しているのである。根本的経験論も，抽象的観念論を斥けより“生”に忠実な理論を展開しようとする動機より主張されているのである。“生は混乱して溢れ出ている。そして，若い世代が渇望しているものは，たとえ論理的厳密性，形式的純粋性の犠牲においてしても，生の気質をより多く持っているものなのである。”[17] とジェイムズはいうが，これが彼の哲学をする時の基本的姿勢であり，彼の常識の立場である。又，これによってジェイムズの実在論における矛盾とか曖昧さも理解されよう。ジェイムズは，一つの世界観 (Weltanschauung)[18] を築こうとしていたのである。

1) W. James, The Meaning of Truth, p. p. 6-7.
2) W. James, The Principles of Psychology, Vol. II, p. 283.
3) ibid. p. 283.
4) ibid. p. 301.

5) ibid. p. 295.
6) ibid. p. 297.
7) ibid. p. 311.
8) しかし，ある観念（例えば神）が，主観的に満足を与えるからといって，その観念を知的反省においた場合，疑いを持たざるを得ないことがあるであろう。この問題は，ジェイムズの哲学における問題の基本的パターンを示している．拙稿，"ウィリアム・ジェイムズの真理論—真理の功利性について—"，立正女子大学短期大学部研究紀要，第15集参照。
9) E. C. Moore は，"我々は外的実在が，これを感覚すると関係なしに実際そこにあることを証明することは出来ない" としている。(E. C. Moore, William James, New York, 1966, p. p. 118～119)
10) W. James, Essays in Radical Empiricism, p. 13.
11) ibid. p. 93.
12) ibid. p. p. 131～132.
13) ibid. p. 76.
14) W. James, The Meaning of Truth, p. 6.
15) 実在が，人間の意志によって変化するという考え方も世界観的な見方であるといえる。ジェイムズは，実在を静的に見る合理論とプラグマティズムの差異を次のようにみる。"プラグマティズムと合理論との相異は，……もはや認識論の問題でなく，宇宙それ自身の構造にかかわるものである。" (Pragmatism, p. 168.)
16) ジェイムズは，神の観念のプラグマティックは価値を認めている故，彼の実在論からすれば，当然神は実在することになる。しかしジェイムズは，この論理を使って神の実在を証明することを，はっきりとは行っていない。
17) W. James, Essays in Radical Empiricism, p. 39.
18) ibid. p. 40.

（一般教育講師）